栃畑谷集落跡

栃畑谷は石見銀山で最も古い鉱山労働者たちの共同体の 1 つがあった場所です。遡ること 16 世紀の中頃に出来た栃畑谷の集落は、石見銀山が 16 世紀後期と 17 世紀初期に栄えるのに伴って拡大し、少なくとも江戸時代（1603–1867）の中頃までは人々が暮らしていました。鉱山労働者とその家族たちは平坦で階段上になった土地の上に建てられた家々に暮らしていて、江戸時代の栃畑谷に関する記述に現れるいくつかの仏閣にて礼拝に出ていたと見られています。家や仏閣は一切残っていませんが、台地を補強するために建てられた石の擁壁は今でも見ることができます。丘の斜面にはいくつかの坑道の穴も見られます。

早くから人々が定住していただけでなく、栃畑谷は石見銀山においてより国際的な共同体の 1 つであったことも注目に値します。集落に関する記録に登場する韓国人や中国人の居住者たちは、日本へと高度な鉱石加工技術の知識を伝える手助けをした技術顧問だったかもしれません。こうした技術の 1 つが、韓国で発明され、1533 年に石見銀山へと紹介された、銀を精錬する灰吹（「灰吹き」の意）法です。この年は石見銀山の歴史におけるターニングポイントとみなされています。石見銀山を有名にし、16 世紀中期以降の世界経済へと貢献した、高純度の銀を大量に生産することを可能にしたのが灰吹法だったからです。